

風 飾

柳 多 留 三 卷 編

~9
1147
33



門へ 9
番 1147
巻 33



とまよふたまふさのし歌國の句とあるは
つらなるを詠本は好くあらば梅本との
せく梅本をみそしるの篇といふされり
今より一巻あるの細布なるは本録あり
ひ孫ある世道の好人本をねむるとし
いふまじあまねに書きしとて道れ
白く子た海にけり文を海に今川は探
生合くみとありのらんをねあはし
のつこれ白くあはつげぬまを
舟浦に遠せんをかきりてとて
蒼蒼とる

湯渚天満宮奉納白合

川柳評

御先祖と子孫の間に切通し
是等のいひねど配笑へあこを道ひ
露り園をいねほどの露をまひ
あそぶたちかめうけの外はまなり
是禱のなやれる萩ハは十刻
兄この徳あれはこそまゝく下り
直カ付子ニツリこむ雲の影

折世四一

あやまきよ森く居とこのゆほいれ
大門へ毛虫をこまかつまここ
あしをまゝなるとあはれくが別れ
まゝとけくは葉あいやつと抱き
あはれ舟方よ似くまつくけび
あり袖のそく浴むもえぐるし
糸のるあむし幕くいとまなり
梅の本のむけをこなくと時平い
糸詰の涌くやうなのく湯渚く

ちんまろとよああつとあひ榮ひ
角田川等やも一首詠こたうり
内をゆりしき智の英一さ
を々の料理神意子大ちがひ
年始帳内用めつるあめらねる
いぢやけ世とつれくよあれたり
智魚の輪をさうくた政くらせる
采うをれくよいこハ抄子ひめきん
掛もも二星三星奏と帰み

柳世二

うづらでもよと藤入よまくあ
よくけとあさずよとつ子申の
欄外ことんぐホ天を目
迎き帝や敷よまぐいをさとなふれ
るまぐ久川つま合くめしを
こいつらのまばい久ねとふもらり
あのみをませくえせうとこを下
席りよハあま橋をみくあらし
あきららう子似様を笑ふまき人若

人あこよ泣くあとかある大三十日
梅あへけくとい嘆もあ志あうん
日商りの日るひは毒車うるし
梅枝とせ千とか体と日まへへり
さうをば坊主おまへらりよす
紫礼子人備の唇ぬうもああ
袖イ差いあまへむくうたもあ
伸條の目を川にぬくもあんあ
手ああ下けんをてはこはあ

柳書 三

らのい虫すがまほむこあひく居る
芥川こつちも通るあり
あり袖のまちまよんへる女
あふれよ下女後立の子まやうさ
けぬくとあへば下女をまふませ
目黒不動寺奉納句合

川柳評

十辨のよ存んトめハ不動寺
とんご中継まがんとく三日居る

石山の草紙一より川ヶがわ
若うふくハあしとちよまますりちび
彫りかけの白あとの有る境イ海
元々くあるとハすとい年始へ
丁にゆくあれが祐をちのセツ
幼畧をむすこがするとにくまれの
志媛よそれ母に浮きナヤリなごり
八舞ハやつまもまごつれよあり
何さあよるもがあごと娘ハえり

柳世四四

軽梨り妙唐の音ハ村海あり
幸ふハ海のもれあるあ作り
や梅の神ぐうちつくくあやごり
せがけ道及来ぐ切れやうごと免ひ
裸身を詠よのまれのやうよえ入
且ねあまませうとにッ子帯をこま
か祢のれあいなうをしく泣あされ
瀧子をおやだと母めるのハまん白
庚かまよを候せる汗林陸

秋そのかきつけ神も 仏あり
借りの多葉の葉ハつげ子咲き
葉の山これハ鳥まき 結ひつけ
かきしを裸ぐあげもつともさ
毎月とまくのガ 枚子定木ん
あり袖くあつを三有衣あひーら
なめ下ゆせら 葉まこれ
者下りるぶとんへく外へおひ
山王くんれば二階をたてらなり

柳世四五

乳母が千活子ころま 葉あへ

王子稻荷社奉納句合

川柳評

心の子を二月のりちをめるなり
結成子ハ天もまたハ仕た子ハ
結成の足えら子けり 都を
和をまけハけらむあんなん
乳母以へ葉のどくまめ子ま
羽子の子も天うら澹くすめら

年玉の腐火消く 射をまきり
子ノ目入屋うかりしきし
殿孫のまのハ茶んの希斗り
ま里一夫のどしきく 妾志かろり
初年子布やしきのまぶとてよ子
あまめける 女朝めしきう 巻ひ
羽子板を売いしきかきし
あ母しきあの中へかき居る英し
外へあかりきき 卒をハ極の下々

第廿四上

踊子をもちまのハあきく 仕込ん
とむしきう 洞のめ通まきかきり
人の涼をかがりしきしきり
田のまきく 妹大るきでかきり
てんじらもあしと 踏子の子をまきし
あやまつしきやろりき 卒をまきまきけり
法師の中かあめびおく せす袖をきり
どめすろりえよあき 世帯きり
林樂堂たふしきりきりきり

紙巻を下母の志れし仕由が母
さうりやせりあせかく志やるといふ物
あんまり目がおこりおこり年とすれ
あびおねと謙ぶおどかた妻のせり
ま先指荷奉納白合

川柳評

神前をつらぬくはむの志神木
まひるうざんどは渡しこりぬけ
姫の帯りあー一ツかつふたぎ

神世四七

笛よまあるやうは紅葉えんまがそれる
油口で神さく志のぐにとりあ
神楽堂前をあてぬうい
大一座よりとりよしく志うれる
下駄の志田町の志扱へけとをきれ
田舎たふやれと語へ語をか
志をの淋しくかへるけつらさ
祓ざれく志合もたなく願ふつま
手こりの獅子はかありをこりこり

待宵子とせんをさつー女房あて
そのまじらめつらなよと舟ハ
かり橋くせ碇能をりのけり
友佐あつらひが流るこ美子あり
つるか免も湯流の固へこめく坊主
かまつたをさ澄こませうとわ免るあり
あつら山のかけりを轍のたをり
かへり碇目まをーくハよむるん
つる子をまじらめと下甘まぐ

折田八

一年よ一度蛇のあるにまやうさ
村をべすと千里も流るこころん
村の婿志んづくところたせり
悪んこーく居なよと娘新をたて
けんハのモか子居るまごさり
キのまやの松も徳もハをあく
居つてけハ舟との美とかわりし
をーごがうあまりいそひでころけ
あかるた大方婿よ志よーめられ

か村のれさううむいぐまある一
常子あこのハ能くもやれくされ
浮きかより中体一と敷をいざ
切餅の中をなぐセツと行をふま
文着をやめをばうめね始皇帝
かつらうさば一このまばもセツと
一人り若よいやうらうところり橋
みづひをらうそおげぶとふあり
壁よたえかけあるのをいんまあけ

神七口十

のまりまのま梅ははつはのばつ
杖入の依をなりをかりて入れ
かまきま子らつかくかいるが
むろぶりくといぶてんおつかけ
乳をいへ入れ蓄えらぶく
百ちら子上下をまらぐ信ひ
ちよとひちハ三合目か
喰積る子のつづつをり
徳イ幕といやかあぶ乳のり

秋舎川柳評

全浪のち王様の道所あり
唐人の眼子ハ端なくよむこえへ
鳩の子ね毎日あふちおめてしとさ
舞形の糸トへ糺ハこほれとら
なえうしをニかひんねく切落
けんもん子糸目を拵ッハよこひかま
げん^い信^ここ^くこ^くこ^く梅やーま
懐中へ籠のたち賣むすこ入れ

評世四十二

おれも中々とひたこ下女まもつてる
てい志の星をの光のたぐひまこ
武蔵野は露月町ハハッ^い名^のり
新道のまふとををづあちますす
下流へ喜ぶめ^の印^ぐく^りす^むい
いせういんせえたむに^か利^あい
蜻蛉のぶをふちり^まある^ふ家^花
十三枚をへうりさせく^ぬく^唐る
いせやが熱ぶいま^ろを^なたく^切り

所通のふえやれちるなこれちる家
射るせうまきのつしまけくをり
唇峰ぐ大工も通ふの名うきー
物まのあくもろじハセーこころ
かまろを将根のそへてるまがこび
栞麻子すまうあ人もニツあー
玉葉ハあうろくさこへ名をのこー
やれ梅こりあろ子九人まよあり
反法りを梅のちるね不二の山

新九四十二

海居丁ともししちるなお日り所
らつハヤの粒子る臭やハまりハ
ニ迫りぐあこんりくとししをが
午りたあ娘子ニ依あませの氣
とりあるへうこんをりすへくま
さう梅をうめたぐあが志のがれず
け中ひがまらひあこ 四天王
中房かにくくあがね中 の町
酒よりまきしよまのたのえらるー

糸ををるのふくむたとかもひ
大やとまき森不このふくをえく
つものこまきいこまきまき入る
つ首尾ふ祥へこまきはあまがさ
紅あうと珠の扶具ハがもろ
あもん坂まきをのなまき
株接へ毎五人こまきのあをつけ
境あん中か子六神ハ虫のま
血子あ百の止ねへちちあ

新北四十三

家内安金女房と母えなり
こつ八世志ませんまかいねつかれず
か房をたろあもてぬやつ
月糸の者息えせやま家をほり
焼つきをよんどんまをけを鳴き
いむこぶとつあま庄屋へまよめま
又道まろく横へ手をのむし
月を二度志まろく月を寄ます
をなき里の一こハハわむなり

他人こんぢぢういりほがなほまよませ
新造の口へろうふおのここと
鳥だの種のこと学老子を志り
梅やーまがら東風が吹き入りへつけ
ろくの貝すこをりをするまふ
あやーた老かつきけく餅子する
鯛の湯づけのあつ月も下戸あらび
あつるい伝をけいせいと役老なり
あつるい手忠に里にむきあつるま

新七の十一

あつるいびぢぢのこつたのーむほあんなA
あつるいびぢ子梅がついでと母子んせ
あつるい梅改帳の申へ所業なり
あつるい萩をあらうとかりと伴たごい
あつるいぐえ目をつらう大をんま
あつるいハ大するてい志田舞毛をぬく
あつるいおく松風お表ハ小萩あつるい
あつるいゆめ里こ十のびをからすえ
あつるい市のはん大こくを信つれくよあ

つんがうハ光をくりおのつる
千あふひち坪にツ声をあけ
田げのたつやらん葉をのかけ
かろく老一トかまりのまねる
村を舟をぬをうつすとまをたけ
北の一人りのかまよ入るむつ
不自由なかまよ此たのすもたの
いとむづらいまひ内えセがひけ
あうまのやくまといふむるあやそり

柳世四十五

おまのかまごのうまかいすらん
料名の外にこまねむあく
秀川のこり二人の舟をうけし
ねむい目の横えへね目の横え
赤川のすけんすたぐ坊となり
かんだんまのつり灸すへの端
かろくまのこんおしうをハ乳を
あま名をとあへむらこむ新や
村まむす大まなまぐやたあ

ものゝるのよき有をいふのこゝろ
声おまんすしき白のしきが下り
后なりかこせまうをたぐ紙のあ
川れいゆびをなめくあつりこみ
大急大病をあ中まりそたう
指をかづつけむすめハささるん
そこ申たて切就又士兼海一
紙かへり志ゆびよくゆけいあなうか
子のかこもゆめハ出しく路のれ

新世四十二

かへりあを相織のきそへうとこ
あうせんまきま人これをしうんす
引出しよつのもまごつてえせ開ま
あましくあなすしりなまきをす
ひまなまうい紙のかさりゆまなり
祿主のあうあ子様田産あ
とひるの白の月を切しきい百
ありがさいゆ代になす紙をさ
仙人よなることさるもあく生ま

梅のかうげぐまはなまりざ
火迫し下女ひやひこはごり
をんちうさ女帝に役者ざまざり
早らちのあづまを志まら子あま
まづさかひせまいと姑よこがたり
松風子治のきかすお中し
味喰ふハひまらなやつうす人姑メ
所仕衣ハ外ト子轉おれこ戸を鳴らす
及ぶ所をニツ子あつこ下女こせな

七年催七月初令 文日堂評

暖味中の道ゆき冬のきかこ海り
此嘉祥ハ口よ土梨の入る日
浴巾ハ故帳をつくるゆるゆる
他久男丁のりこきを桂屋し
此月毎のきこみをやたさ
島子に井日松屋や子五やどり
不まれさハ梅屋ハ廿六子屋し
女月毎のきこあやめをいつこき

孤雲 春駒 玉草 香貞 雨夕 登川 玉草 再父

下流の島を喰済す角力あり
 菱の道と名のなるるあつし中
 鳥さしのせいき物の子さほす
 雨川ハ猿の向ふ子安房上総
 果のいし中葉破へ海の子整がうす
 赤板をよつすくたれら江戸老
 そと風を羽織すつむ夕涼と
 三白るこ糸の通る聲の鳥
 手い縁ハ五物を己けくきり

邑市
 柳雨
 春巧
 百々
 〃
 柳雨
 千潮
 如春
 玉季

行
 五
 一
 一

三條ノ谷ハ加へるもなるこまきまひ
 子の物か親のぶきいハ娘をくり
 けちを意今戸細工をいりうい
 ありあの子と加ふちや足やうせやう
 身なけのたしまりかたつと云男
 和尙と毎夜甲子信をすり
 又信のたうり子よと印をれ
 同月二念目 文日堂評
 暗の夜とあうるく海る堂持

百々
 伝事
 車道
 友時
 玉季
 伝事
 雨夕
 柳枝

尚志即妙なころびと梅のふ
 類方世が定家の作の中
 蓮生の巻へ艾をのせくすし
 早くあつたまのハ名が言し
 人因りかす帷子と白き垢
 ぬいぢりの相々さる更法近江
 志げと戸の例さぶらうがころける
 むんだ念ぐあいの遺傳も血まみれ
 志のぶ指かきも尾ハ活をすま

梅雨
 春駒
 〃
 柙雨
 雨夕
 玉季
 芋洗
 虎鈴
 雨夕

梅雨四ノ七二

糸の毒さ綿を將根ぐ搦く雁
 ちりくことぶるこ箱の車をよさる
 手揃をえれバヤ市さんたを禿
 ち人ハ居なぐら日焼く空をま
 二日出の栲牙舟者のたろ舟
 椽先（引まぐちく指のこげ
 岳甲（浦活をうと火をんま
 生碎の目子幸海の二ツ赤
 星とまとの糸もも年が出る

春駒
 車道
 雨夕
 〃
 井辺
 春駒
 〃
 如春
 花流

ぬれらまはまゝの羊廬の大黒
 態こいくと山崎ふいをきり
 牛も八斤すみ虎を陣子奪
 子り若子田舎大まきこまのてり
 娘さ振と右自つりし逢い
 三途川のぢい様よく色
 ぬれゆぐ大評判の彩五郎
 ころろくの摺子本並おきこまり
 暗のまへへまぐ快食を下せ八渡

鹿野
 眉老
 柗雨
 鹿野
 檄久
 邑布
 手季
 雨夕
 柗雨

柗雨四ノ世二

あ方の味を湯ぐ出しあは出
 大笑い陣子搦をすりこり
 せ八月三舎目 文日堂評
 よこれぬれおご子のあはゆ日
 軒庵のらんおご子の子のまきり
 犬の使ッ一代子一なまら
 和洋のたてたをこ愛者有賣
 娘うそむくこ松風おごり
 仕在サ六子子おねを折り

熊季
 雨夕
 春以
 玉季
 有年
 本候
 柗雨
 露草
 春以

三會同すりこかまはへ来くすり
 日本をすじしちるこ英人界
 三韓を味方子つけと桃太郎
 水鳥のゆられく福むる波花
 風長家の子よあせくゆ縁再
 新燈りたきくぬ土地の旅りさ
 藤まよいこかんせんこ藤すま彦
 忠のあぢ娘あたつ星月夜
 地のすくまき精分舟(水邊)云

鹿乾
 松家
 眉老
 千瀬
 素玄
 有父
 春約
 雨夕
 休雅

柳州四ノ九三

猿たごいずりありと並松の内
 こころのこ孔明指を好むるん
 此畠程ハ急んりよなしこ娘
 翁のきまあこなる若妻人の子
 草物艾結でハあつらうらうら
 桃灯ののちをまこ人ごり
 咽斗りかづくのせやのかくハ餅
 詠高村の細い日向子様半
 姉くまのつるるち子妹連

雨夕
 春約
 雨夕
 雨夕
 機久
 雨夕
 機久
 雨夕
 登川
 千瀬

せいらしなるといふとんごまら子、
 馬路こひひるを三なる有へ下ら
 かの子をすくえく海に小児馬若
 舟をよみ山を育く川をほく
 首だけとまらく淵をにいて
 右賃のそまり開かぐ持く来ん
 かりたぐまらる程ゆる絲の子
 乳首を授けしはるる物の子
 かへまらく居る子月だの糸だの

香員 玉季 柵雨 糸仁 機久 芋洗 眉若 連遠

解世四ノ七四

玉の門子ハ黄の本をたて子はし 露草

五月廿五日 文日堂評

天地人形巾子があがる席の様
 端の糸くくるを生挿むがしは
 左んせうは高松をうやねへ虹がき
 十五夜の花をさう此理とあはれず
 名月子九曜のまらる不意を子
 風衣を知らぬがは大名
 一里塚日本一ハ橋をかけ

赤雅 是紫 玉季 白冠 万人 孤雲 玉季

千重をもちろとま〜く娘のれ
分敷の花子桑を喰ふ女希跡
程命を帰ハみ人下子成り
あうぶのすろと徳子目か二ッ
舟の陣生身〜風呂家一ッゆき
常雛の首ぬきやすと帰のこ〜
形を赤やくきた橋をのりあふ
系橋よなる道つちぐ〜丙午
自妙を秋々お杉〜かけるあふ

辨世四九

雨夕 徳子 菅裏 春駒 雨夕 井雄 松家

息子母津たごうまがの〜らる聖
立子呈〜く在自子あ〜く小俊不
石草ハ老海のそイ甘され〜
酒やの〜せにた〜く〜ひ〜ろ〜
これを作〜く〜高し〜ま〜様
それ物をあ〜つ〜か〜つ〜け〜く〜母〜河〜ん〜
かり〜あ〜びん〜の〜ち〜れ〜し〜ハ〜海〜子
ママの形相あ〜んだん〜ハ〜梅の木
まん丸な日〜陰の並〜お〜海〜場〜了

柳雨 風子 菅裏 井雄 松家 万仁 木笑 万仁

大門を的のやっやハ矢のこころ
 ありたんは河の掬のハまき居
 五十さう江口の君のつらハ光
 十好をかぢるのこまぢ梅を
 ちんちけなかかハ生美子ハし
 村をり生碎ちくをのます
 すんぞんと月吉系と志田丁
 花や久次を植木やと下女也
 上銘をたてまのをうちほ
 玉子
 喬旭
 菅裏
 若水
 孤雲
 有華
 春物
 笑水

柳世四ノ廿六

乳首の縷をつらく子を
 七八月五念目文日堂評
 五明樓上愁府の色をえす
 千社れみり九番卯福を
 二本の指子十系解跡を
 以延川巻の案なこはるん
 梅名あくと梅りこぢあ
 香子蔭ハ升を旭がゆり
 虫う知り大臣のをまねか
 柳枝
 松前
 菅裏
 風子
 孤雲
 柳雨
 若春
 是果

面白イ和歌塚をまん中か子立
 四都丸都八門と五丁のまもり林
 毒丁のやま四地ぐね人あり
 紫ハまんまかのこかぬぐ染々
 ま井近お路ハ死でものがらん
 赤や一まかぬぐく追の舟をる
 赤やむぐ名言いぬぐハ海塩ん
 志ろ加付の山をつくひめーが出来
 蛤も尻もえんる 六 赤 仙 有華
 孤雲 木架 柙雨 青裡 菅裏

柙世四ノ七七

一日ハ皆志ろゆまはけく出る
 後の舟娘のまぶら追も出る
 津業垣あるぐ追下り山岩戸丁
 梅子のませるむくろる付くり
 赤川の是的まーく彩田の矢
 赤や一まある矢あひ鈴乃のーぬ
 夫婦そろろく津柙子破ぐでまきり
 七の子こめのままり庭筒井筒
 せくまけへーろり落るるをまぎす
 黒塚 柙雨 有華 赤雅 赤仁 玉孝 柙子 柙雨 鹿乾

かゝつつけあうれんきをりや美
 ぬき足をあぐ李下へ台をてやの
 林の子と桑ハ和薄の孝不孝
 内あやめんぐつくを下るころんが
 九月九るち梅よむす。ゆく
 たれよんあまこく記松好を塚家村
 を産つくぐ日本へ二日出る
 よし下へ孝母の谷をうつくやり
 さざりすぐ産のざざをちよとハキ

李什
 雨夕
 柳雨
 木笑
 里家
 里家
 若氷
 里家
 北春
 北馬

柳世四ノ七八

世九月六今日 川柳評

笑は梅ハ法本の兄のゆきん
 せんあうさ名本の舟もあねま
 柳柳沖の汀ぐびくくこ
 せんほごま七ナニる馬をひま
 唯キ梅よあろくよろける茶度り
 うち人帯をがさず子あるあろり
 刺切ること小刺百あびをす
 藏者ハ二あマ玉子産をつけ

木笑
 万仁
 伝成
 雨夕
 万仁
 若菜
 菅裏
 産鈴

じんごうをぬきまうせるふのうた
 仲人をこよみだたくをぬつた
 て人の志ごまのこけのぬすぐた
 八海の外はますすまおろいこ
 産石のぬきんをけいおん
 乗配をぬきんをせよおや
 菜れのこまをぬきんをせよおや
 伝香のあたりのぬき香のぬ
 大八の油をぬきぬきなりせし

半洗 是菜 如春 産石 万仁 春約 必春 押雨 青裡

押雨四十九

質なきを根ありをぬきぬき
 きのちらもすまぬぬきのこるひ合
 茶やぬきぬきぬきぬきぬき
 豆のりぬきにぬきぬきをぬきぬき
 秋の茶子のぬきぬきぬきぬき
 大第のぬきぬきをぬきぬきぬき
 廿七月七念目 川柳評

落こいぬきぬきぬきぬきぬき
 胃腹をぬきぬきぬきぬきぬき

半洗 岳水 素岩 雨夕 押雨 伝成 春約 箕山

三尋の傳はぶしまゝかんにしる
 紅葉のむらりあへまよかーいし
 繪る者八時代返しも朝まぶ
 すでのゆ柳 梅まなもあや
 三尋のあーたるをささる
 時わらう三日日向をささる
 ひゆく塚みさるよ丹の出た
 りんらん玉もさるーあまなり
 月をけりまよさるしん

柳世四、三十

五尋のむらりあへまゝかんにしる
 今ありく大文字やの布も
 三千のうちまらるる偽者も
 名もあまのさるまよさる
 ありあまのあつて時のそま
 出口のむらりあへまゝかんにしる
 境海まけあちとまのさる
 尻かゝるまよさる
 寛永のなれりあへまゝかんにしる

下仁 里梅 里梅 菅裏 万仁 登川 玉季 芋流 玉季

茶 野んやの月見(子)をいり
 かりし厨島子の居りゆくまじり
 まけするの方へ歸りたたり
 たみやの娘まえのりり男
 切づを授らんやう(ちん)すげ
 者ありのえ祖廟を造り
 むまををぬくまを精牙す
 さしふは湯を吞ぐあそする
 あぼく家の白お道矢布の中
 春 鹿 曉 雨 矢 正 美 春 玉 青

柳世四ノ三十一

なくやがめる若ハお人子あすまれ
 あすくのまこは伝法さそあつあり
 者子梅ハ知られれれどぞと和尙
 其あけんものこる男ねうたり
 病をんくせざるはまこは和尙
 七十一月八會月川柳評
 鳳凰ハアア、ぬ門を渡らん
 せん志あうは年とをうさあを臣
 聖人を之ををけしくばんん仕
 春 鹿 曉 雨 矢 正 美 春 玉 青

十月の梅芳地ぐ後を出し
 さそふあまの上中うれま
 むやどり類きぐまう白の徒
 十こなかくをりてると露ヶ園
 傍正の七尺にへおのこちりる
 温公八年のかりり瓶のかり
 小くう山十るあが物を 出まき
 赤のぶずり紅葉の形付ぬん
 はずがいの山ぐをく春の川

三松
 里梅
 玉季
 雨夕
 横好
 玉季
 万仞
 芙蓉

撰世四ノ三三

何のまうさんゆと早をり
 皇の下給釣み梅ぐかくをあて
 かへ土子御秘を左のあるしこ
 宮のなにせと物や道水さい持
 ある時いさしこかけ梅かや
 美ごつていねへて幽王何き
 ことせねちうさんづつとよあこ
 あまきけや郭巨が谷をかやじ
 函行も初らひ鼻づつとすの忍

里梅
 雨夕
 里梅
 登川
 伝成
 箕山
 シント
 横好
 管裏

あをつるみしづの筆の老くあり
二八きは七百の年をさるるひ
将門へ尻をえやれと孔子出
らさるる首を立脚の大方がり
みごなひをせだんつれく
揚弓場矢をのまりを酌くら
茶臼山清沢なつば下サ笑イ
及陸子いひのハるの因信ん
まろくなれし右柳子下サかし

青裡
芙蓉
里家
風鳥
雨夕
玉季
春約
雨夕
鹿乾

柳井四ノ三十三

たんくし声をひそめる笑ふ
村出遊ぞうろく林をわしたを
馬野こあ野つるへく遊出たれ
鼻はこせがれはせつひたすけき
及のこよはをさるる一人者
そし月細倉

下谷箱荷社奉納 川柳評

箱の外一位の位を内花以
此端あがき後此林をさるり

万人
柳子
玉季
孤雲
鹿乾

柳井川
孤雲

此神流稲子八束の穂々みのり
 廣徳子入の門へ年々
 正の子を別当一字の穂
 拍子こりぐらゝを懸垂
 梅やーま自社の丁及中体
 月の唯くもつぐれ稲花のいのほ
 正法ないなり計らう杖か
 島子つれ田町々九十九社同
 稲つけハ王子をせくまか
 磯川
 成成
 里塚
 換好
 車道
 青露
 鹿角
 善露
 シト

柳世四、三十四

舟中く遠るをする 舟田川
 立社くこたつふの懺之
 以免のりぐらゝ子懸ひら
 巨妻ひ一疋こげく二疋ぬり
 弓のり百社ハ飯をなと
 古砂こりお身ぐ稲を雨
 魯のまへた田いありハ
 子ぎやうを抱くやびた
 流活の池瓶ハるの
 磯川
 眉也
 可仁
 松家
 雨夕
 善露
 善山
 雨夕
 号案

こんれいのかさつらんりかひた
 玉季
 ちをりのやうふろつる千社れ
 柗雨
 あ憐むすびのやうなまををき
 茅沓
 しまやうなゆきをきあへてる
 眉長
 ぬえんはかあがこじへてる
 菅裏
 さつとした繕るハぬきさうの草
 雨夕
 沖歩堂よりこしぬおくれね
 万仁
 右類函模著

柗栢三十四編終

柗世四三五

